西野古海編輯
鹿島英雄銘々傳
三ノ内

鹿児島英雄銘々傳巻之三

大山綱良

旧鹿児島藩令多しが西々の
偽言を信じ金銀米穀を
尽力して其資用に供せ
ば遂は朝廷の問ふ所と
なりて拘引されたり
或曰大山は旧大坂
の天満与力大塩
平八郎の養子なり
大塩覚之助なりと

A437
2
010190507870
48-7712

樺山久兵衛

旧薩刄の士族
ふゝて鎗刀の術よ
きこゝ且強膽ゝ
今回の暴挙ふ隊長
ふ撰ぶ且熊本へ出
張ぶり各所の堅壘
にうつて志むく官
軍よ抗ぐるゞ後の
日向に退き又鹿児島へ
突入ゝり

西郷
菊治郎

隆盛の一子ゝり性温
順ゝて学ゝを好ゝ今回の
暴挙ふつゝ屢ゝ父ゝを
諫ゝ兵用ゝ且ゝ
不得止ゝ出陣
ゝり各所ふ官
軍ふ抗ぐるゞ
遂ゝ天兵よ
降伏ゝり

市來勘助

鹿児島の士人にして私学校黨の一個なり武道に達し砲術の名誉なり是等徒い西々あるを知て政府あるを忘れ暴徒あり熊本縣に出張し田原坂および植木御舟ホゆて忽ち官軍に抗せしが遂に人吉にて討死せり

本田久右エ門

篠原國幹の僕にして膂力人コナミ且忠義の志し篤く戰地に赴くに晝夜主人の側を離れず然るに國幹運つきて山鹿の露と消し久右エ門立々主人の首級を古々ホ持かつて南林寺埋葬し

その夜髻をそぎひて主の菩提を

別府九郎

別府新助の一子ニ
して薩摩島縣下
私学校の教員
たり軍学
及び築城の
法ニ精しく
賊首西々の甘言ニ
陥り父子共一肥後に出兵
して山賊木留ホ
大ホ勇戦為さるホ

村田正信

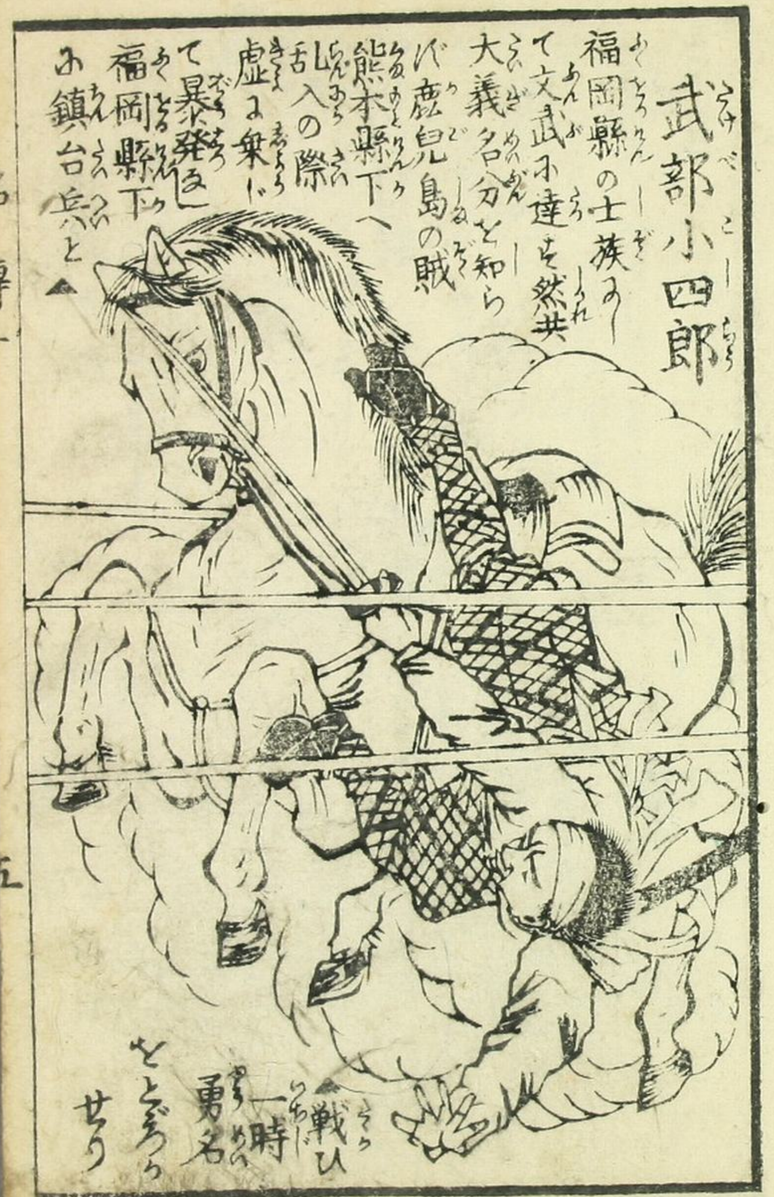
性猛烈ニして
聽勇ニ且砲
術ホ達ひ肥後香
寄の戦ひホ土穴ニ埋
伏して官兵ヲ狙撃ン
又密ホ西々と計リて
櫓の中ホ替ニて不
意ホ官軍ホ切込ミ
ときめき猛者ヘとそ

谷藤太郎

旧佐賀藩の士族ゆーて去ル年暴挙の際追々捕縛ゆ付ケらるを如何ゝて脱出ん密ゆ鹿児島縣下に潜居ゆ今回の暴挙を僥倖とゝて肥後へ出兵ゝて勇戦るぜーとゝ

武部小四郎

福岡縣の士族ゆて文武ゆ達ゝ然共大義名分を知らず鹿児島の賊熊本縣下へ乱入の際虚ゆ乗じて暴発ゝ福岡縣下ゆ鎮台兵と戦ひ一時勇名をとゝろせり



川北新九郎

鹿児島の士族にして勇猛無双
美心鉄石の士なりしかども
其中より今回の挙を
非分の吏と知りながら
不得止暴挙をなしるを
妻女わ夫をいさめて終に
自殺ス三歳の小児父を
川北侯ゑ〳〵小児を刺殺し
出陣ゐ〳〵とゐ嗚呼無智
なるかな川北順逆を不知可惜々々

徳久孝次郎

江藤新平の甥にして
佐賀縣の士族なり
先年國患を醸出
吏ゐ〳〵獄屋ゑ
つながれるが風雨夜
獄屋を脱し各所に
潜居し星霜
を経て遂に
鹿児島の
賊徒に
加りぬ

石井武之助

江藤新平の甥なれば先年佐賀縣に於て暴發のとき更ゝ逃て山間ふかくまぎれ又ハ村落ふひそこ時のいたるを待たるに不計西ゝの暴挙をきゝ躍躍して之ふかゝり肥後地侵入のとき各所にて勇名をあらはしるゝが遂に木留のゝとひよ討ぢとり

市本勘助の妻

夫勘助人吉ゟ討死せ〜報をきく
悲歎のあまり何卒〜て
官軍ゟ仇せんと

▲四才の男子を脊ゝ負大膳
夜ゟ密ト甲突川ゟ行柵と切ゆ逃
官軍の弾丸ゟ中り母子とも川中
ゟ命
と
あ
と
せり
とい

加藤固

熊本神風連の残
賊すぐれ二刀の達人
なり至然ゟ神道
尊信あ〜本昔と
取失ひ今般西ゝ不〜
本年三月廿七日得意の両刀
おゝ官軍の陣へ夜討
〜て大勇をふる
ひ〜とゞ

鎌田市兵衛

薩州鎌田村の農夫なれ
ども力量あく迄強くつよに
相撲をとりて九州ハ
並ぶものなし西々の
暴挙ハくしに二重嶺の
持口を固守ぎりく
官軍抗〻勇猛を
ふるひ〻て天の網
のがれがたく遂ハ
加久藤にて討死せり

明治十年八月九日御届
發兌明治十年九月

編輯者 西野古海
第四大區一小區錦町二丁目十番地

東京 書林 木村文三郎
第一大區十二小區馬喰町二丁目一番地

奏尾氏